

## 明治期の横浜の謡曲・能楽

近藤政次

### 一、はじめに

現在の横浜能楽堂が西区紅葉丘に移築・開館してから平成28年で20周年を迎え、記念として能面の公募、入賞した能面の展示や横浜市ゆかりの曲目である六浦、放下僧が演じられた。さらに本年4月には観世流の能舞台が渋谷から縁深き銀座に移転して能楽の魅力発信に挑戦していることが報じられている。

加えて、5月11日の朝日新聞は観世流シテ方の能楽師で人間国宝の梅若玄祥氏が明年（平成30年）の3月に能楽界で重い名前である梅若実を四世として襲名することを報じた。玄祥氏は明治時代にシテ方の名人といわれた初世実（前名・六郎）のひ孫で、観世流から自立した二世実の孫。三世実の名は故五十五世梅若六郎に追贈されるという。

能楽は江戸期にあつては將軍家の式楽として位置付けられ、式家層を中心に観世、宝生、金春、金剛、喜多の五流が存在した。幕末の開港から貿易を中心とする商人の街として発展した明治期の横浜の謡曲・能楽の歩みを追ってみる。

### 二、草創期の動向

（1）金春流の動き

明治42年3月25・26日の横浜貿易新報（以下「横貿」と略す）は「横浜の謡曲界」と題して市内住吉町に師匠の看板をかけたている金春流の金春磯吉の話をして回にわたって掲載している。それに依ると横浜で初めて謡曲の稽古に励んだのは製茶売込商の豪商、岡野利兵衛、大谷嘉兵衛の2人であつた。岡野、大谷に指南したのは明治維新の直後に関西から横浜にやってきた金春八左衛門であつ

たという。八左衛門は関西の地では名前の知られた能楽師で、横浜で商業に従事した。信用の厚い岡野、大谷が八左衛門に師事したことから商人たちが八左衛門のもとに足を運ぶようになった。このため、彼は商売を止めて謡曲指南を本業とした。

明治23年に八左衛門は病をえて横浜の地で没した。数年後には横浜の金春流は衰えるに至った。このため、東京の家元・金春八郎は自ら、金春磯吉らをひきつれて、横浜の弁天社境内で能楽を演じるなど、流派の勢い回復に尽力した。明治37年に金春磯吉が横浜に定住して指南所を設けるに至った。

岡野利兵衛（初代）は開港とともに横浜へ進出した駿府問屋の系統であり、明治18年の製茶の受荷高は1万3913個、横浜の製茶売込商で第3位の扱い高だ。大谷嘉兵衛は伊勢出身で同年の受荷高は2万2947個で第1位の座を占める。大谷は米国のスミスIIベーカー商会（米三番館）の茶買入れ係を勤めた後、明治元年に独立した。後に生糸売込業にも進出、さらに横浜第74国立銀行の頭取なども務め、横浜商業会議所

会頭、横浜奨兵義会会長、横浜市教育会会長、貴族院議員を歴任し、明治後期く大正にかけ、横浜の政財界を代表する人物である。

一方、金春八左衛門は明治23年、金春磯吉は明治45年春に横浜で死去した。大正2年4月13日に横浜金謡会の主催で午前8時から市内港町5丁目の浜港館で故金春磯吉の一周年追福素謡会が開かれることとなった。これには東京の桜間門人、横須賀、埼玉県の粕壁、千葉県の木更津、東京の故磯吉の門人横浜金謡会の代表らが素謡を11番。仕舞を桜間金太郎、桜間金龍が舞って故人をしのぶとしている（「横賃」大正2年4月9日）。また、金春八左衛門の息子熊太郎は亡父の23回忌に相当することから大正2年5月18日に横浜市浜港会館で正午から八左衛門の追福の謡会を催すこととなった。これには東京金謡会、横須賀金謡会、横浜金謡会の代表のほか、東京から金春栄太郎、同花子、同熊太郎、同光太郎、桜間左陣、同金記、同金太郎が参加する予定（「横賃」大正2年5月9日）としている。

（2）観世流・梅若実と横浜のか

かわり

①梅若実（初世）のことⅡ観世流のシテ方、文政11年4月江戸生まれ、本名は梅若氏実。天保7年観世流梅若六郎の養子となり、安政6年に通名（通称）の六郎を襲名した。明治5年に家督をゆずり実と称した。幕府崩壊で帰農した宝生九郎を能界に復帰させるとともに明治維新直後の混乱期に東京にとどまり、能楽の灯を維持しつづけた。宝生九郎、金春流の桜間伴馬（後の左陣）とともに明治のシテ方三名人と呼ばれた。嘉永2年から明治41年まで記し続けた日記はまさに江戸末期から明治の時代の能楽の歩みを残した貴重な歴史史料となっている。同日記全7巻は八木書店から「梅若実日記」として公刊されている。明治42年1月死去。

## ②梅若実と横浜のかかわり

◎明治6年4月8日の横浜見物Ⅱこの日、早朝に浅草区の自宅を出る。鉄之丞、栄吉、医師の市川の4人で新橋駅へ。駅で絵師の狩野玉えん、善次郎、吉之助、寺井久八郎の4人が加わり計8人で汽車にて横浜駅（現桜木町駅）に行き、

外国商館を見物して会芳楼で休息する。それから現在の伊勢佐木町方面へ足をのばして吉田橋通りの和田源でウナギの蒲焼きで昼食を済ませる。

横浜駅に行き汽車で川崎駅へ出て、川崎大師へ足を運んで参詣して汽車にて自宅へ。帰着は夜の8時であった。梅若実45歳の春であった。

◎明治11年11月の横浜見物Ⅱこの年の11月16日に梅若実は横浜区弁天通6丁目の梅屋細井久次郎方へ。鉄之丞、六郎、吉之丞、要三郎、半二郎、又太郎、彦兵衛が同行した。囃子が3番あり、仕舞で三輪を六郎、松風を実、春日竜神を鉄之丞が舞った。同家に実、鉄之丞、六郎の3人が泊り、残りの者は夜7時の汽車で東京に帰った。

翌17日、梅屋の息子栄太郎の案内で横浜を見物する。英国人ケセキの洋館を見、通訳吉田の自宅へゆき、午後1時19分の汽車に乗って東京へ戻る。

◎明治11年12月の横浜見物Ⅱ12月4日、観世鉄之丞、梅若六郎とともに華族坊城俊政が京都へ出発するので、朝7時から供をし

て横浜弁天通5丁目の蒸気船問屋福井屋へ。九重丸という船に乗込み、海から横浜の街を見物した。夕方6時15分の汽車にて8時過ぎに帰宅した。

◎明治13年、宮川香山のモデルにⅡこの年の11月25日横浜在の西大田村の宮川香山という焼物師宅へ。これは花咲町3丁目の青木常次郎からの依頼にもとづく。狸々の装束を付けることから観世鉄之丞、梅若六郎、同万三郎、同誠を連れて出かける。絵師は桑原小山。謝礼は前後の車料と装束料5円。そのほかに肴料として千疋（2円50銭）を受け取り、夜8時半に帰宅する。12月3日に青木常次郎に先日のあいさつの手紙を出し、宮川香山への伝言も依頼した。なお、初代宮川香山は京都から維新後、横浜へ移住した。彼が完成させた真葛焼は明治日本を代表する陶器で国の内外から称賛された。

◎伊勢原大山神事能とのかかわり  
伊勢原大山の神事能の歴史は古いが、梅若実とのかかわりを確認できるのは慶応元年2月7日に大山の御師佐藤主水、同彦太郎（大住の息子）の2人が梅若宅を初め

て訪れた。両人は佐藤大住と相原貞甫からの紹介状を持参して観世宗家への直弟子（入門）となることを希望していた。このため梅若実は関係先を走りまわり、2人の宗家への弟子入りを実現させた。2人は5日間の習練を終え、17日に大山へ帰る。大山の神事能はこの月の28日であった。

明治6年10月には大山社中の主催で小田原の元本陣大清水で15日から5日間の日数能が催された。大山側の強い要望で梅若実は六郎、吉之丞の3人で出演した。大山の能楽師は村山千秋、神崎翠、成田民雄、同糺、同増次郎、岡田稲置、佐藤栄吉、二階堂部（の）8人が出演している。

これ以降も大山能との係わりは明治16年まで続く。

（3）茂木惣兵衛の梅若への入門  
観世流のシテ方として名を成していた初代梅若実に横浜の豪商・初代茂木惣兵衛が入門したのは明治14年11月16日である。同日の梅若実日記（以下「日記」と称す）には「午後三時より二番町岩崎小次郎へ初めて参るゝ外に塚原周造、茂木惣兵衛門入。」と記している。岩崎小次郎は大蔵省の

高官で後に秋田、大分、滋賀、福岡四県の知事を歴任する人物である。塚原は農商務省の高官で当時管船局長を務めていた。官を辞してからには浦賀ドック、浅野総一郎の東洋汽船の経営に携わる。

梅若実はこの時49歳、茂木は52歳であった。茂木が梅若実の門をたたくに到ったのは東京在住の実業家である子安峻、中山讓治の影響・紹介であったと推測される。明治13年12月20日、横浜に開業した扶桑商会（資本金30万円）の副頭取に子安、取締に中山、監督に茂木が就任している。同社は生糸、茶を中心に国産の諸物産を直輸出することを目的とした。翌明治14年2月20日の東京横浜毎日新聞は子安が頭取に、中山が副頭取に就任したことを報じている。

子安、中山の2人は明治13年春から東京の有力実業家である大倉喜八郎、益田孝、克徳兄弟、三野村利助らとともに、梅若実を師として謡曲・能楽の習得に励んでいた。とりわけ中山は熱心であったことが「日記」の随所からうかがえる。茂木が梅若実に入門した接点はビジネスを通じて知友となっ

た子安、中山であったと見て良い。

茂木惣兵衛（初代）は文政10年10月に現在の群馬県高崎市に生まれ、原善三郎とともに横浜の生糸売込商を代表する豪商。明治13年の生糸入荷高は8076個で第1位、第2位は原の5299個。横浜国立第74銀行の頭取などを務めた。晩年は家督をゆずり保平（初代）を名乗った。明治27年8月に死去。

明治14年という年は開拓史の官有物払下げ問題、10月12日に参議大隈重信が罷免され、これに抗議し、中央省庁の官僚が大量に辞任した明治14年の政変の勃発。横浜では6月頃から生糸取引をめぐり内外商人の利害が対立し、茂木、原ら生糸売込商たちが中心となって改善実現をめざして設立した横浜連合生糸荷預所紛議事件が起きた。茂木はその渦中に立たされた。

明治15年1月17日の「日記」に横浜の茂木惣兵衛（弁天通）に出張稽古に訪れた梅若実に大谷嘉兵衛、茂木保次郎、大西吉松、水谷吉兵衛、前嶋栄太郎が入門した。大谷は先にふれた製茶売込商だが、大谷の名前はこの1回のみ登場

で終わる。茂木保次郎は2代目惣兵衛となる人物。大西吉松は関西の出身。この頃茂木の下で第74銀行の取締役、水谷吉兵衛は丸三銀行の横浜支店長、前嶋栄太郎は横浜株式取引所の肝煎である。いずれも茂木周辺の人々だ。

### 三、明治15年、梅若一門の出

#### 張稽古

明治15年1月～2月の1年間に梅若実及び一門の者たちが横浜に足を運び門人に対し謡曲の稽古、指導を実施した回数は「日記」に依れば51回の多さを数える。梅若派総師である実が22回、同万三郎（実の子供、15歳）2回、観世鉄之丞（40歳、実の親せき）14回、梅若六郎（34歳、実の後継者）18回、同豊作2回、西村新太郎（21歳）1回、宗家（観世清孝）1回で、合計延べ人数は60人にのぼる。東京の梅若一門が実を先頭に新興の街横浜への普及に力を尽くした姿が浮かび上がる。この態勢は弱まることなく、日清戦争直前の明治26年10月には月12回の練習定例日が設定される。

何故横浜にこれほど梅若実が精

力をそそいだのか、その事由としては①茂木、藤野善輔、依田弥助、箕田長二郎ら門人の核となる人物たちの熱意、②交通の利便さ、新橋～横浜（現JR桜木町駅）に鉄道が走り、この区間の時間は約50分。年々、列車の本数も多くなり急行などもダイヤに登場し、使い易さが向上したこと。当時の横浜は駅から歩いて10～15分のエリヤが中心であり、本町外13町の計14町会が中心であった。大岡川にかかる弁天橋を渡ると茂木、原など有力商人の店が軒をつらねる弁天通り。桜木町駅から山の手側が花咲町、野毛町、老松町などで、豪商たちの別荘があった。③活気に満ちた新興地横浜への期待や将来性に魅力を感じたと考えられる。梅若実は先に述べたように何回か横浜を訪れ、外国人、西洋館に高い関心を寄せている。④東京は観世流宗家に、自分は東京に拠点を置きながら新しい地域の開拓をめざしたのではないか。

### 四、養心会の設立

明治18年2月22日の「日記」に初めて「横浜養心会」の呼称が登場する。「日記」は細やかなこと

を記していないが、これまで「茂木連」、「横浜連」と呼んでいたものを統一したもの。その背景は横浜の門人の増加であろう。当初、茂木の私宅を練習場に行っていたものを、この年から20年初めまで大光院という寺院を練習場とした。同寺は宮崎町の野毛不動の真下に位置していた。横浜養心会は門人たちへの連絡、素謡会の会場設営などが主な役割だった。会長などを置かず世話役、幹事などという名称であった。以後、「日記」の記載は養心会で統一されていることから梅若実の意向で変更、組織化されたと考えて間違いない。

#### 五、伊勢山能楽堂の設立

明治23年6月21日、横浜市  
の総鎮守・伊勢山皇大神宮の敷地内に能舞台が新設され舞台開きの奉納能楽が演じられた。舞台は三間四方、橋かかりは3間に幅8尺、観覧定員は400名。橋かかりは地所の狭さから短縮された。費用は能楽堂500円、楽屋など450円の計950円。見所(観客席)が設けられたのは明治27年10月6日の秋季能からである。能楽堂の設立は前年の2月11日の憲

法発布祝賀会で横浜公園の即席づくりの舞台で横浜の能楽愛好者が舞った仕舞の反省会の席上でのこと。翌月の3月14日には藤野善輔方の出入大工が浅草区の梅若実宅の能舞台の寸法を取りに訪れた。「日記」は「横浜に新たに舞台を設置するため」と記しており、一年以上前から準備がすすんでいた。

能楽堂の舞台開きの奉納能楽一式を梅若実が60円で請負った。幹事は藤野善輔と依田弥助(初代)の両名。番組は翁||梅若六郎、羽衣||同実、橋弁慶||観世鉄之丞、猩々||梅若万三郎が演じた。狂言3番が加わり仕舞は安宅||依田弥助、天鼓||水谷吉兵衛、能坂||藤野善輔の横浜の門人3人と梅若新太郎、観世清廉が舞った。豪華な番組と言って良い。舞台開き祝いとあつて60円という安さだが、さすがに「以後は100円づつと極る」と「日記」に記している。

#### 六、明治31年の横浜の謡曲家数

「横賀」は明治31年10月1月にかけて横浜市内の素人謡曲家投票を実施した。それに依れば氏

名・流派の判明する人たちは観世流（その多くが梅若派）が72人、宝生流54人、金春流10人、金剛流7人、喜多流5人の合計147人が確認される。さらに流派不明の2点得票者18人を加えると、合計165人の人々の氏名が明らかとなった。トップの得票を得た岡野隠居（金春）とは初代岡野利兵衛であり、大谷嘉兵衛も金春流として名を連ねている。

川宝生流の歩み」横濱近代史辞典」

「神奈川県民俗芸能誌」永田衛吉著、「横濱市史第三卷上」、「開港と生糸貿易中巻」藤本実也著

## 七、宝生流の奉納能楽

明治29年5月10日に横浜宝生会主催の能楽が伊勢山能楽堂で開かれている。宝生九郎、松本金太郎、同長、野口政吉らが出演している。明治36年12月6日には宝生流の横浜渾々会の素謡会が港町の浜港館で開かれている。金沢啓次郎、松崎新吉、菊池正雄、市村久次郎、高橋頼治らが出演している。同会の奉納能楽は明治43年6月12日には第27回を数えており、毎年春秋の2回演じられたことを物語っている。（了）

## 《参考文献》

「梅若実日記」全七巻、「明治の能楽」第三巻、「お能と横浜」、「神奈